

思想の流儀について

野田茂徳

『ロシア的情念とは何か』を最初に発表したのは慶應義塾大学の『三田新聞』であった。時に1970年の春まだ浅い日であった。論文は定期連載の形をとりながら、その後約1年半にわたって掲載された。『ロシア的情念とは何か』を執筆する私の姿勢については、単行本として刊行(国書刊行会 1975年)した際に、「あとがき」の中で以下の如くしるしておいた。

論考は回を重ねるにしたがって、私の個人的な関心の強い方向へのめり込んでいった。ロシアのインテリゲンツィアの選びとった<道>であり、また強いられた道でもあった<観念>と<日常生活>を結ぶ回路での生きざまは、とりもなおさず今日の個々のインテリゲンツィアに投げかけられている主題なのである。霧深き旅路の如くロシア・インテリゲンツィアが遭遇する困難な舞台は、私たちの出会っている回路でもある。

そこで、痛みをもった存在者として、信仰深く、そして敬虔なロシア・インテリゲンツィアの<観念>が、そのまま私たちの<個的存在>が<共同性>に達する運河であるかどうかということを問う。この問題は、これから先は各個の存在のなかに委ねられた主題なのである。

それ故に、私は論考をすすめる途中においても、たとえば<デカブリストの反乱>を論じる際にも、それをロシアだけの「出来事」に閉じ込めてしまうことはできなかった。自ずと日本の<問題>との関連の糸を、たぐりよせることを試みたのである。そうしないかぎり、ロシア・インテリゲンツィアの生きざまを論じることは、まったく<意味>をもたなくなってしまうからである。

そういうわけで、本書の内容はそうした論考の過程の上に立って<表現者>とは何か、インテリゲンツィアとは何か、ということをつねに根底にすえざるを得ない至極当然の作業となったのである⁽¹⁾。

論考を深め構成していく方法はいくつもあるわけで、一つの方法が絶対的であるわけではない。『ロシア的情念とは何か』の場合は、国内外の他者の著書から直接コトバを引用し論文の土台の構成をはかったのでもなければ、チチコフの哲学とコトバの援用によって構成したのでもなかった。私は、そのような方法によって己れの学問や思想の表出をはかろうとする流儀をとらなか

ったのである。〈表現者〉がどのような立場をとろうとそれは各人の方法の問題である。

そこで、私は、〈個的存在〉から出発し〈共同性〉に達することを、己れの思想的運河の展開と視ているものであるが、当然、それは観念的思考によってだけで展開されるべきものでもなく、史的検索と読書に支えられつつも、しかしなによりも生きることに於いて思想的〈体験〉⁽²⁾を強いられた、時間的収斂によって表出するものであると思うのである。

ところで、人間にとって、この上なく不可解な存在が、人間であるということを絶え間なく〈体験〉し知らされてきたのであったが、それでも次のような「チェルヌイシェフスキー論」の一節を挿入している『ロシアの情念とは何か』が1979年の1月から3月にかけて *Kapacy* という名の「役者」たちから「註」や「参考文献表」がないということをおもてつけた奇妙な芝居を見せてもらった事があった。それは異端審問のための宗教裁判所の裁判官の言辞を弄する、人間の尊厳を嘗めきった芝居であった。「役者」の台詞にはまっすぐなものはなく、ことごとく屈折したものであった。私は、チェルヌイシェフスキーの生きざまの一部を、自からの筆でしるしておいたことにおいて、すでに奇妙な芝居を歴史の中に見ていたのであった。

形式のみが専門的研究であるかのような外的形式のみが論文の内容を決定するのではない。まずなによりも、自分の思想が現実の土壌の上に起ったものになることを、自分の論文⁽³⁾は課しているということを語るのである。

教授会の論文審査風景が、どのようなあわてふためき、しかめっ面をしたか想像がつくのである。伝統的な論文の記述作成を採らなただけではなく、自分の展開する論拠にたいしても、すでに述べたように、銜学者にたいする皮肉をこめていっさいの引用を必要とするような展開の仕方を選ばなかったのである。論文は、学者の密教集団結成のために、ある面で作用するのであるが、そのような銜学者の再生産構造を破壊するためにも、きわめて一般的な結論にとどまるテーマを選択したのであった。一般的な諸結論であるのはいいが、またこれはあまりにも広範囲にわたるものであった。チェルヌイシェフスキーは、あえて広範囲にわたる研究題目を選んだのであった⁽⁴⁾。

チェルヌイシェフスキーの論文を審査していたのはペテルブルグ大学であるが、時代は帝政ロシア時代の1854年、1855年という、130年も前のことであった。

科学技術の進歩の構造と類型を異にした人間精神の展開は「進歩」というものがありえないとしかいいようのない構造をなしている。この問題に限定して、別稿を用意しなければならないと思っているので、ここではこれ以上ふれないことにしておこう。

ところで帝政ロシアならぬわが国の大学でも130年遅れて、拙著について「註」があるかないかとか「参考文献表」が付いているかどうかという議論がなされたのであった。*Kapacy* という

名の「役者」たちの、その行為は、彼らはそうとは気づかずに大まじめに彼ら自身の「喜劇」を演じていたのであった。私から見れば、その芝居は130年前のペテルブルグ大学の「喜劇」が眼前で再演されたことにすぎなかったのであった。それは強いられた演劇空間と時間であったが、又ひとつの〈体験〉でもあった。この時代遅れの宗教裁判の「喜劇」の役者と彼らの台詞のひとつひとつが、今後も忘れがたいものとなるであろうと思う。そして、「喜劇」の意味は時間とともに大きな意味をもってきたのであった。チチコフの人間がやはり現代にも生きていることを「役者」たちは哀れにも、自からおろかで無惨な台詞を以って語ったのであった。

己れの生活の上っ面を擬装した「文化」は大地に根をもたぬ草木と同じように枯れてしまうのである⁽⁵⁾。

「文化」の押しつけとは政治権力によって、人民に押しつけるものである。ロシアの近代化をはじめたピョートル大帝、さらにエカテリーナ女帝の「西欧」文化の導入がそれであった。これはあきらかに皇帝の名において、人民に強制されるたんなる事象ということだけではない。すなわち近代化、工業化、「文化」の内容は植民地化であったのだ。皇帝の生活様式のみがこの方式に一致することが可能であったが、人民には大地に連ならない生活様式を受け入れるのは己れの生命存在を圧迫される極限状況を耐えて生きるに等しいことがらなのであった。なぜならば、生命存在を賭けて生きることは否応なく存在したのである。彼らはタタールのくびきをそのように生きてきたのであった。そこには、二者択一ではなく、生きるとは己が生命を賭けることであるというただ一つの命題のみがあった⁽⁶⁾。

哲学や思想領域の学問は深く人間にかかわり、人間そのものが主題となっているだけに厄介なのである。たとえば役者が個人生活においてはデタラメな生き方をしている人間だとしても、舞台では「聖者」を演じる如くに、言うことと行うことが、乾坤に裂けてしまっても、舞台には立っているという具合にである。

1850年代半のペテルブルグ大学の教授会の構成員が、専制主義の下で何かの役廻りを演じさせられていたとしても、それはこんにちから見ればやはり「喜劇」でしかないのである。ヨーロッパから見れば、アジア的専制主義の下で強制された「悲劇」であっただろう。しかし、そうではなくタタールの遺制やアジア的専制主義の影よりも、むしろ各個の学者の中に内在するエゴイズムが、専制主義者に見すかされていたのであった。彼らは自分の演じる場さえ与えられれば、ひたすら己れの保身のためにだけエゴイズムを發揮するのである。そのようなわけでこの小さな「喜劇」はペテルブルグで開幕したのであった。

しかし、こんにち1850年代に生きたあの教授たちは、たれひとり生き残っていないのである。

時代はそしてあの「喜劇」も人間の死という時間の収斂によって幕を閉じてしまうのであった。

一個のインテリゲンツィアの存在は、その者の魂に発するものであるのだから、存在を圧迫するものが社会的事象の中にあれば、即時的に己れの魂を圧迫している対象に向って、全的対応がなされるのである。このような対応は、頭の片隅にだけに知識をもっていることで対処する知識人とは、対極をなしているのである。

ところで、こんにちの状況では、インテリゲンツィアをいく人見出すことが可能であろうか。

ごまんというわが知識人たちは、朝に夕に悪夢にうなされているかのように呼吸する。そして悪夢を解説しはじめているのである。彼らは予言者なのか、説教者なのか？ 私はそのいずれも彼らには期待しないのである。なぜならば彼らは悪夢さえもみているのかどうか疑わしいのである。彼らは悪夢をみるのではなく、解説するのである。彼らは悪夢をみるという現実行為からはほど遠いところにいるのである⁽¹⁾。

『ロシア的情念とは何か』において、論考を展開するために第一次資料の文献検索をどれだけやっても、己れの存在と魂を除外しては「文献資料」からは何ひとつ出てこないであろう。

<ことば>によって個的情念が表出されるのであれば、<ことば>は客観的な資料によって発することはできない。<ことば>を語る己れのみが、内発的の第一次資料なのである。<ことば>は主観的・主体的に語らねばならないのだ⁽²⁾。

ところで、明治以降のロシア・ヨーロッパ・アメリカのあらゆる領域の翻訳ものは国民的共有財産のごとく読まれ、語り継がれ、すでに私たちの体内奥深く、血となり肉となってしまうのである。そうしたものを体内から「文献資料」だけをえぐり出せということは、かのヴェニス商人さえ手出し得なかったその事以上に不可能なことである。

しかし、こんにち『ロシア的情念とは何か』について以上のことを前提として、のぼせきった阿Qやしっぽを垂れた阿Qのためにではなく、存在の魂にわななきをおぼゆる人びとのために参考書目⁽³⁾をしるしておこう。

しかして、汝が魂と存在はいかにありや。

註

(1) 野田茂徳 『ロシア的情念とは何か』(国書刊行会 1975年), 267頁。

(2) 野田茂徳 「哲学の源初性と流儀」(『基督教哲学研究』創刊号 基督教哲学会 1978年)においてすでに私は、なぜ森有正のいうところの〈経験〉ではなく〈体験〉という語をとるかという理由について以下

の如く述べている。「森氏の思考の中心に、存在に向うところの存在それ自身、存在とはそういうものでありますが、〈経験〉というものは森氏にとって個的な単なる経験ではなく、人類に達することを志向するところの普遍的価値に高められる個の存在そのものの内部を電流の如く走る生の喜び、そのことを森氏は『歓喜』とっています。

つまり、この世界の凡ゆる客観的なもの、主観的なもの、そういうものをすべて含んで、この現実そのものが一つの経験である、という発見をしたのだということを言われているわけです。

そして、〈現実〉そのものが〈経験〉であり、〈経験〉は〈現実〉そのものであると明確にいられているのです。この〈経験〉ということは、いわゆる国語辞典に見出す『経験』という語ではないことはおわかりと存じます。森氏の哲学語としての〈経験〉は、いうまでもなく記号であります。単なる記号ではすまさないという思い込みが大きい語であります。西田幾多郎の〈純粹経験〉という主客合一の原初的事実とは、自分では比較して全然ちがう、と言われていました。そのように意識して言われているので『ちがう』異った概念なのだと思う以外にないようですが、森氏が客観的なものも、主観的なものを凡て含んだものとして〈経験〉という語を提示されるとき、西田哲学の〈純粹経験〉とどのようちがうのか、疑問は残ると思います。

西田哲学において世界は〈歴史的境位〉であって、〈純粹経験〉の中に閉じ込めていたわけではなかった。いってみれば実存的境位が時間とともに歴史認識として展開していったのです。主観的なものと客観的なもの凡てを、西田幾多郎は〈歴史的事実〉の中にみようとしたのではないのでしょうか。そういう比較をしてみた時に、森氏の西田の〈純粹経験〉とは全然ちがう、という『経験と思想』のなかでの意志表示はまさに主体的であり主観的であります。そのことはけっして意味のないことではなく、むしろ哲学するものにとって、己れの手作業を公開しているということによって重要な意味を対他者に与えるものです。ちがう、全然ちがうのだと言われれば、そのことに注視して展開と見る以外にないのです。

にもかかわらず、全然ちがうこともなかろうということをおは考えるのでした。それは西田幾多郎にしても、森有正にしても観念の絶対化が深まる領域のこと、すなわち宗教について〈体験〉しているからであります。私はここで森氏のいう意味の〈経験〉をあえて〈体験〉という語で申しておきます。森氏が〈経験〉を個人の単なる経験的な事柄ではなく、普遍的、人間としての存在を〈歓喜〉という体験を経て、人類への共同体験に達するものかどうか、それが森氏にとっては〈現実〉と〈経験〉の関係性で語ろうとされたのだと思います。しかし、それはあくまでも現時点では手作業の手順を、思考の日常の様態を公開された段階で留まっていたと思います。それ故に、『経験と思想』の第Ⅱ部は『〈実存〉と〈社会〉』であるという、そうあらねばならないという思いが森氏のなかに渦巻いていたことが容易に理解できるわけです。遂に、第Ⅱ部を発表される前に、おなくなりになりました。森氏の〈経験〉には、歴史的認識が欠落しているのではなかろうか、そうした疑問が、私にはありまして第Ⅱ部が出なくなり、その疑問が〈純粹経験〉と〈経験〉の類似と展開を比較した時のまま残ってしまいました。

〈経験〉という枠のなかで、すべての意味を盛り込んでしまうあまり、言語が記号機能として円環運動をおこし、コトバは盛り込まれた主体的、主観的作業とは関係なく単純化されてしまっているように思います。永遠なるものを志向する過程は、日常においてありふれた生活の累積にしかすぎません。そこではとりすましたコトバが〈経験〉であっても、ただの〈口〉になってしまうのです。私たちが累積としての人類の共同溝に倒って立つとき、歴史〈体験〉はコトバを越えるのです。信仰体験というようなことを言語化してしまうと、それは〈体験〉の運河を通して心的領域の時間・空間に共同性を持ちうるものが、色褪めるのです。ある時はのっぺらぼうなものにしてしまいます。そうした現象が起きうるのです。

存在のディレンマを内包した姿が〈体験〉という語にはあります。実存そのものの痛ましい現実がそ

こにはあります。〈経験〉ではなく、〈体験〉という語を私がここで選んでいる理由の一つはこういうところにあります。」(21頁～23頁)。

- (3) 1854年10月ペテルブルグ大学に提出されたチェルヌイシェフスキーの学位請求論文
«Эстетическое отношение искусства к жизни»
- (4) 野田茂徳『ロシア的情念とは何か』178頁。
- (5) 前掲書 100頁。
- (6) 前掲書 100頁～101頁。
- (7) 前掲書 104頁。
- (8) 前掲書 130頁。
- (9) 拙著書の刊行後、あらたに出版され継続刊行物等を含め、さしあたりここではロシア語による関係資料を中心にするしておく。

「ロシア的情念とは何か」

参 考 書 目

1. Алексеев, Н. А.: Процесс Чернышевского. Архивные документы, Редакция и примечания Н. А. Алексеева, вводная статья А. М. Панкратовой. Саратов, 1939.
2. Амальрик, А.: Просуществует ли советский Союз до 1984 года? Амстердам, 1969.
3. АН СССР: В. И. Ленин и русская общественно-политическая мысль XIX-начала XXв. Л., 1969.
4. АН СССР: История русского романа, т. II. М. -Л., 1964.
5. АН СССР: История русской критики в двух томах, т. II. М., 1958.
6. АН СССР: История русской экономической мысли, т. I, ч. II. М., 1958.
7. АН СССР: Революционная ситуация в России в 1859-1861 гг., тт. I-VII. М., 1960-1978.
8. Антонов, В.: Русский друг Маркса. М., 1962.
9. Архив братьев Тургеневых. в 5 томах. СПб., 1911-1921.
10. Архив истории труда в России. в 4 томах, 2 складные таблицы. СПб., 1921-1925.
11. Архив русской революции. тт 1-22. Берлин, 1922-1937.
12. Афанасьев. А. Н.: Поэтические воззрения славян на природу. в 3 томах. М., 1865-1869.
13. Бакунин, М. А.: Собрание сочинений и писем, 1828-1876. в 4 томах. м., 1934-1935.
14. Баскаков, В. Г.: Мировоззрение Н. Г. Чернышевского. М., 1956.
15. Белелюбкий, Ф. Б.: Тайпинское восстание в русской литературе 50-60-х годов XIX в. в сб. "Революционная ситуация в России в 1859-1861 гг." М., 1965.
16. Белик, А. П.: Эстетика Чернышевского. М., 1961.
17. Белинский, В. Г.: Полное собрание сочинений. в 13 томах. М., 1953-1956.
18. Бердяева, Н. А., Булгакова, С. Н.: Вьхи, сборники статей о русской интеллигенции. 2-е. М., 1909.
19. Березин, И. Н.: Китай и отношение к нему Европы. «Современник» №. 11, 12. (1858)
20. Богословский, Н.: Николай Гаврилович Чернышевский, 1828-1889. М., 1955.
21. Богучарский, См. В.: Активное народничество семидесятых годов. М., 1912.

22. Большая Советская энциклопедия. в 65 томах. 1-е изд. М., 1926-1947.
23. Бухштаб, Б. Я.: Записка Н. Г. Чернышевского о романе “Что делать?”. «Известия АН СССР, серия литературы и языка» т. 12, No. 2 (1953)
24. Былое. СПб., 1906-1907.
25. Ведомости-Времени Петра Великого. Выд. 1-2. М., 1903-1906.
26. Вернадский, Г. В.: Русское масонство в царствование Екатерины II. СПб., 1917.
27. «Вестник Народной Воли» No. 5, отд. 2. (1886)
28. “Вехи”. М., 1909.
29. Взгляд на прежнее и нынешнее понимание дела. «Народная расправа» No. 1. (1869)
30. Виленская, Э. С.: Н. Г. Чернышевский и А. И. Герцен о роли народных масс в освободительной борьбе. «Вопросы философии» No. 8. (1960)
31. Виленская, Э. С.: Революционное подполье в России (60-е годы XIX в.). М., 1965.
32. Виташевский, Н. А.: ОН. Г. Чернышевском. в кн. «Каторга и ссылка, историко-революционный вестник» кн. 56. (1929)
33. Власть Советов. М., 1917-1938.
34. Водовозов, Н. В.: Политическая борьба вокруг напечатания “Пролога”; Скафтымов, А.: История текста романа и принципы настоящего издания. в кн. “Пролог”. М.-Л., 1936.
35. Водолазов, Г. Г.: От Чернышевского к Плеханову—об особенностях развития социалистической мысли в России—. М., 1969.
36. Волгин, В. П.: Социализм Герцена, проблемы изучения Герцена. М., 1963.
37. Володин, А. И., Карякин, Ю. Р. и Плимак, Е. Г.: Чернышевский или Нечаев?. М., 1976.
38. Вольнский, А.: Русские критики. СПб., 1891.
39. Восстание Декабристов. тт. 1-17. М.-Л., 1925-1980.
40. Гернет, М. Н.: История царской тюрьмы, т. II. М., 1951.
41. Герцен, А. И. и Огарев, Н. П., ред.: Голоса из России. Сборники А. И. Герцена и Н. П. Огарева, книжки I-IX, 1856-1860. Лондон. Факсимильное изд. в трех выпусках. Комментарии и указатели. М., 1974-1975.
42. Герцен, А. И. и Огарев, Н. П., ред.: Колокол. Газета А. И. Герцена и Н. П. Огарева. Факсимильное изд. М., 1962.
43. Гитлиц, Е. А.: “Черные” и “белые” в художественных произведениях Чернышевского 60-х годов. «Известия АН СССР, серия литературы и языка» т. 37, No. 3. (1978)
44. Гоголь, Н. В.: Полное собрание сочинений. в 14 томах. М., 1940-1952.

45. Гончаров, И. А.: Обыкновенная история. М., 1977.
46. Горячкина, М. С.: Художественная проза народничества. М., 1970.
47. Гражданская война 1918–1921. тт. 1–3. М., 1928–1930.
48. Грибоедов, А. С.: Творчество. Биография. Традиции. Л., 1977.
49. Гуральник, У.: Художественный мир Чернышевского. «Вопросы литературы» №. 8. (1979)
50. Даль, В.: Пословицы русского народа. М., 1862.
51. Даль, В.: Толковый словарь живого велькорусского языка. 4-го изд. под ред. проф. Бодуэна де Куртенэ. СПб., 1912–1914.
52. Дейч, Л. Г.: Г. В. Плеханов. Материалы для биографии, Вып. I. М., 1922.
53. Денисюк, Н.: Н. Г. Чернышевский. Его время, жизнь и сочинения. М., 1908.
54. Деятели революционного движения в России. Био-библиографический словарь от предшественников декабристов до падения царизма. в 5 томах. М., 1927–1934.
55. Добролюбов, Н. А.: Собрание сочинений. М.-Л., 1961.
56. Драгоманов, М. (ред.): Письма М. А. Бакунина к А. И. Гергену и Н. П. Огареву. СПб., 1906.
57. Дзержинский, Ф. Э.: Избранные произведения. в 2 томах. М., 1957.
58. Евгсньев-Макснмов, В.: «Современник» при Чернышевском и Добролюбове. Л., 1936.
59. Евтушенко, Е.: В полный рост. М., 1977.
60. Евтушенко, Е.: После Сталина. 1962.
61. Елисеев, Г. З.: Крестьянская реформа. М., 1958.
62. Ерымовский, К.: Чернышевский в Астрахани. Астрахань, 1952. (2-е изд. 1964.)
63. Жданов, А. А.: Выступление на дискуссии по книге Г. Ф. Александрова. в кн. “История западноевропейской философии.” М., 1951.
64. Зайончковский, П. А.: Отмена крепостного права в России. Пособие для учителей. 3-е изд. М., 1968.
65. Зайончковский, П. А.: Проведение в жизнь крестьянской реформы 1861 г. М., 1958.
66. Замятнин, В. Н.: Экономические взгляды Чернышевского. М., 1951.
67. Зевин, В. Я.: Политические взгляды и политическая программа Н. Г. Чернышевского. М., 1953.
68. Зеньковский, П. В.: Русские мыслители и Европа—Критика европейской культуры у русских. 2-е изд. Париж, 1955.
69. Иванов, И.: История русской критики, часть 3 и 4. СПб., 1900.
70. Иванов-Разумник: История русской общественной мысли, т. 2. СПб., 1908.

71. Иезуитов, А. Н.: Н. Г. Чернышевский и современность. «Русская литература» No. 2. (1978)
72. Известия. М.-Л., 1917-
73. «Известия АН СССР, отдел литературы и языка» т. 14, вып. 2. (1955)
74. Икономов, В. Е.: Накануне реформ Петра Великого. М., 1903.
75. История России в 19 веке. тт 1-9. СПб., 1907-1911.
76. История СССР с древнейших времен до наших дней. в 12 томах. в 2 сериях.
77. Итенберг, Б. С.: К вопросу о влиянии революционеров эпохи падения крепостного права на народников первой половины 70-х годов XIXв. «Исторические записки» т. 67. (1960)
78. К столетию со дня рождения Н. Г. Чернышевского—Отчет о юбилейных докладах в Обществе историков-марксистов—. «Историк-марксист» т. 8. (1928)
79. Кавелин, К. Д.: Собрание сочинений, т. 1. СПб., 1897.
80. Каторга и ссылка: Историко-революционный вестник. тт. 1-15 (No. 1-116). М., 1921-1935.
81. Китаев, В. А.: От фронды к охранительству, из истории русской либеральной мысли 50-60-х годов XIX века. М., 1972.
82. Клевенский, М. М.: Н. Г. Чернышевский в нелегальной литературе 60-80-х годов. в кн. «Литературное наследство» т. 25/26. М., 1936.
83. Ключевский. В.: Церковь и Россия. 1969.
84. Козьмин, Б. П.: Был ли Н. Г. Чернышевский автором письма «Русского человека» к Герцену? в кн. «Литературное наследство» т. 25/26. М., 1936.
85. Козьмин, Б. П.: Выступление Герцена против «Современника» в 1859 году. «Известия АН СССР, отдел литературы и языка» т. II. вып. 4. (1952)
86. Козьмин, Б. П.: Из истории революционной мысли в России. М., 1961.
87. Козьмин, Б. П.: К вопросу о целях и результатах поездки Н. Г. Чернышевского к А. И. Герцену в 1859 г., «Известия АН СССР, отдел литературы и языка» т. 2, вып. 1955.
88. Козьмин, Б. П.: К истории поездки Чернышевского к Герцену в Лондон. в кн. «Литературное наследство» т. 67. М., 1959.
89. Козьмин, Б. П.: Поездка Н. Г. Чернышевского в Лондон в 1859 году и его переговоры с А. И. Герценом. «Известия АН СССР, отдел литературы и языка» т. 12, вып. 2. (1953)
90. Козьмин, Б. Н.: П. Н. Ткачев и революционное движение 1860-х годов. М., 1922.
91. Колосов, Е.: Чернышевский в Сибири. «Голос минувшего» No. 5. (1914)
92. Коммунист. М., 1924-

93. Коммунистическая революция. Сент. 1920 Март. 1935.
94. Коммунистическая партия Советского Союза в резолюциях и решениях съездов конференций и пленумов ЦК (1889–1971). тт. 1–10. М., 1970–1972.
95. Конюшая, Р. П.: Карл Маркс и революционная Россия. М., 1975.
96. Корнилов, А.: Курс истории России 19 века. тт. 1–3. М., 1912–1914.
97. Кошелев, А. И.: Записки, 1806–1883. Берлин, 1884.
98. Красная летопись. Исторический Журнал. Орган Ленинградского Института истории ВКП (б). М.-Л., 1922–1936.
99. Красный архив. тт. 1–106. М.-Л., 1922–1941.
100. Краткая литературная энциклопедия. в 8 томах. М., 1962–1975.
101. Крокодил. М., 1928–
102. Кулешов, В. И.: История русской критики М., 1972.
103. Лаврецкий, А. Белинский, Чернышевский, Добролюбов в борьбе за реализм. 2-е изд. М., 1968.
104. Лавров, П. Л.: Годы эмиграции, ed. by V. Sapir. Vol. I.: Lavrov and Lopatin, Correspondence 1870–1883. Dordrecht, 1974.
105. Лавров, П. Л.: Избранные сочинения на социально-политические темы, в восьми томах. М., 1934.
106. Лавров, П. Л.: Философия и социология, т. 2. М., 1965.
107. Лавров, П. Л.: Народники-пропагандисты 1873–78 годов. СПб., 1907.
108. Лебедев, А. А.: Герои Чернышевского. М., 1962.
109. Лебедев, А. А.: От Рахметова к Волгину—к проблеме эстетического своеобразия Чернышевского—художника. «русская литература» No. 4. (1958)
110. Лебедев-Полянский, В.: Н. Г. Чернышевский. М., 1939.
111. Левин, Ш. М.: К вопросу об исторических особенностях русского утопического социализма. «Исторические записки» т. 26. (1948)
112. Левин, Ш. М.: Общественное движение в России в 60–70-е годы XIX века. М., 1958.
113. Лемке, М. К.: Дело Н. Г. Чернышевского—по неопубликованным источникам—. «Былое» No. 3–5. (1906)
114. Лемке, М. К.: Политические процессы в России 1860-х гг. М.-Пг., 1923.
115. Лемке, М. К.: Политические процессы М. Л. Михайлова, Д. И. Писарева и Н. Г. Чернышевского. СПб., 1907.
116. Ленин, В. И.: Полное собрание сочинений. 5 изд. 55 томов и справочный том 1–2. М., 1958–1970.

117. Ленин о Чернышевском, под ред. И. И. Скворцова-Степанова. М.-Л., 1928.
118. Лермонтов, М.: Собрание сочинений. В 4 томах. М., 1975-1976.
119. Линков, Я. И.: Идеиные и тактические разногласия в рядах революционной демократии в эпоху падения крепостного права. «Вопросы истории» No. 6. (1956)
120. Линков, Я. И.: Революционная борьба А. И. Герцена и Н. П. Огарева и “Земля и Воля” 1860-х годов. М., 1964.
121. Литература партии Народной Воли. Под. ред. Б. Базилевского. Париж, 1905.
122. Литература социально-революционные партии “Народной Воли” Париж, 1905.
123. Литературное наследство. тт. 1- М., 1931-
124. Луначарский, А. В.: Александр Сергеевич Пушкин. Статьи о литературе. ГИХЛ, 1957.
125. Лунин, Михаил.: Сочинения. 1976.
126. Малинин, В.: Старец Елеазарова Монастыря Филофей и его послания. Киев, 1901.
127. Марголис, А. А.: О численности и размещении ссыльных в Сибири в конце 19 в. в кн. “Ссылка и каторга в Сибири. XVIII—начало XIX в.” Новосибирск, 1975.
128. Маркс, К., Энгельс, Ф.: Переписка К. Маркса и Ф. Энгельса с русскими политическими деятелями. 2-е изд. М., 1951.
129. Миллер, И. С.: Вокруг “Великорусса”—некоторые вопросы стратегии, организации и тактики русской революционной партии начала 60-х годов XIX в.— в кн. “Революционная ситуация в России в 1859-1861 гг.” М., 1965.
130. Мысляков, В. А.: “Отцы и дети” в восприятии Чернышевского. «Русская литература» No. 2. (1978)
131. Народны русские сказки А. Н. Афанасьева. в 3 томах. М., 1936-1940.
132. Наумова, Н.: Роман Н. Г. Чернышевского “Что делать?”. Л., 1972.
133. Некрасов, Н. А.: Собрание сочинений. в 3 томах. М., 1971.
134. Нечаев, К.: К Путь к духу. 1975.
135. Нечкина, М. В.: “Земля и воля” 1860-х годов—по следственным материалам—. «История СССР» No. 1. (1957)
136. Нечкина, М. В.: Н. Г. Чернышевский в борьбе за сплочение сил русского демократического движения в годы революционной ситуации—1859-1861—. «Вопросы истории» No. 7. (1953)
137. Нечкина, М. В.: Н. Г. Чернышевский в годы революционной ситуации. «Исторические записки» No. 10. (1941)
138. Нечкина, М. В.: Н. Г. Чернышевский и А. И. Герцен в годы революционной ситуации —1859-1861—. «Известия АН СССР, отдел литературы и языка» т. 13, вып. I. (1954)

139. Нечкина, М. В.: О взаимоотношениях петербургского и лондонского центров русского освободительного движения в годы революционной ситуации—1859–1861—. «Известия АН СССР, отдел литературы и языка» т. 14, вып. II. (1955)
140. Нечкина, М. В.: Юбилейная литература об Н. Г. Чернышевском. «Историк-марксист» т. 10. (1928)
141. Николаев, М. П.: Из истории публикации романа Чернышевского “Пролог” в Лондоне. «Русская литература» No. 3. (1971)
142. Николаев, М. П.: Н. Г. Чернышевский. Семинарий, 2-е изд. Л., 1959.
143. Николаев, М. П.: “Пролог” в художественной системе Чернышевского. «Вопросы литературы» No. 7. (1978)
144. Николаев, П. Ф.: Личные воспоминания о пребывании Николая Гавриловича Чернышевского в каторге в Александровском заводе, 1867–1872 гг. М., 1906.
145. Новикова, Н. Н. и Клосс, Б. М.: Н. Г. Чернышевский—автор прокламации—газеты «Великорусс». в кн. “Чернышевский и его эпоха, революционная ситуация в России в 1859–1861 гг.” М., 1979.
146. Новикова, Н. Н.: Н. Г. Чернышевский и комитет «Великорусса». в кн. “Революционная ситуация в России 1859–1861 гг.”. М., 1960.
147. Нович, И.: Жизнь Н. Г. Чернышевского. М., 1929.
148. Обручев, В. А.: Китай и Европа. «Современник» No. 1. (1861)
149. Оранская, Т. К.: Роман Н. Г. Чернышевского “Что делать?”—к истории текста—. «Русская литература» No. 3. (1977)
150. Пекарский, П. П.: Наука и литература в России при Петре Великом. в 2 томах. СПб., 1862.
151. Памяти декабристов. Сборник материалов. тт. 1–3. М., 1926.
152. Панаева, А. Я.: Воспоминания. М., 1956.
153. Пантин, И. К.: Социалистическая мысль в России—переход от утопии к науке—. М., 1973.
154. Пастернак, Борис Л.: Библиография. 1969.
155. Первая русская революция. Указатель литературы. М., 1930.
156. Пинаев, М. Т.: Еще раз к истории лондонского издания романа Н. Г. Чернышевского “Пролог”. «Русская литература» No. 3. (1972)
157. Пинаев, М. Т.: Комментарий к роману Н. Г. Чернышевского “Что делать?”. М., 1963.
158. Пискунов, А. И.: Очерки истории школы и педагогической мысли народов СССР, вторая половина XIX в. М., 1976.
159. Платонов, С. Ф.: Очерки по истории смуты в Московском государстве 16–17 вв.

- СПб., 1910.
160. Плеханов, Г. В.: Сочинения, тт. I—XXIV. М.-Пг.-Л., 1923-1927.
161. Плимак, Е.: Мемуары “Забавного человека”. «Вопросы литературы» №. 9. (1979)
162. Погдин, М.: Древняя русская история до монгольского ига. тт 1-3. М., 1871.
163. Покровский, М. Н.: Н. Г. Чернышевский. Тезисы тов. М. Н. Покровского, согласованные АППО ЦК и МК ВКП (б). От комиссии по организации 100-летнего юбилея Н. Г. Чернышевского. «Правда», 1928 г. от 15/XI, №. 265. в кн. Покровский, М. Н.: “Русская история с древнейших времен, т. 4”. М., 1934.
164. Покровский, М. Н.: Очерки по истории революционного движения в России XIX и XX вв. М., 1924.
165. Покровский, М. Н.: Чернышевский и крестьянское движение конца 1850-х годов. «Историк-марксист» №. 10. (1928)
166. Покусаев, Е. И.: Н. Г. Чернышевский, 5-е изд. М., 1976.
167. Полярная звезда. Лондон, 1855-1869.
168. Пометки В. И. Ленина на книги Ю. М. Стеклова “Н. Г. Чернышевский, его жизнь и деятельность” (1909). в кн. “Литературное наследство” т. 67. М., 1959.
169. Порох, И. В.: Герцен и Чернышевский. Саратов, 1963.
170. Правда. М., 1917-
171. Пресняков, А. Е.: Образование великорусского государства. СПб., 1918.
172. Пролетарская революция. М., 1921-1940.
173. Протоколы и стенографические отчеты съездов и конференций КПСС. 1-24 съезд. 1898-1971.
174. Протоколы первого съезда партии социалистов-революционеров. СПб., 1906.
175. Протоколы второго (экстренного) съезда партии С-Ров. СПб., 1907.
176. Пушкин, А. С.: История Пугачевского Бунта. СПб., 1834.
177. Пушкин, А. С.: Полное собрание сочинений. В 16 томов и справочный том. М.-Л., 1937-1959.
178. Пушкин и его современники. Материалы и исследования. тт. 1-11. СПб., 1903-1927.
179. Радищев, А. Н.: Материалы и исследования. М.-Л., 1936.
180. Радищев, А. Н.: Полное собрание сочинений. В 3-х Томах. М., 1936-1953.
181. Радищев, А. Н.: Путешествие из Петербурга в Москву. Л., 1969.
182. Революционная Россия. Вып. 1-77. Париж-Лондон, 1900-1905.
183. Рождественский, С. В.: Служилое землевладение в Московском государстве XVII века. СПб., 1897.

184. Русские плачи (причитания) вступительная статья Н. П. Андреева и Г. С. Виноградова. М.-Л., 1937.
185. Русский биографический словарь. В 25 томов и 2 доп. тома. СПб., 1896-1918.
186. Русское боготство. СПб., 1896-1901.
187. Пыпин, А. Н.: Н. А. Некрасов. СПб., 1905.
188. Рейсер, С. А.: Некоторые проблемы изучения романа “Что делать?”. в кн. Н. Г. Чернышевский, “Что делать?”. изд. подготовили Т. И. Оранская и С. А. Рейсер. Л., 1975.
189. Розенталь, М. М.: Философские взгляды Чернышевского. М., 1948.
190. Розенфельд, У. Д.: Н. Г. Чернышевский. Минск, 1972.
191. Русское Историческое Общество. Сборник. тт. 1-148. СПб., 1867-1916.
192. Рылеев, К. Ф.: Полное собрание сочинений. М.-Л., 1934.
193. Русское социально-революционное дело в его соотношении с рабочим движением на западе. «Народное дело» № 7-10. (1869)
194. Рюриков, Б.: Н. Г. Чернышевский. Критико-биографический очерк. М., 1961.
195. Рязанов, Д.: Маркс и Чернышевский. «Летописи марксизма» т. 7-8. (1928)
196. Съезд Советов Союза СССР, союзных и автономных советских социалистических республик: сборник документов, 1917-1937 гг. тт. 1-8. М., 1959-1965.
197. Сборник, посвященный 50-летию со дня смерти Н. Г. Чернышевского. Саратов, 1940.
198. Сиромятников, Б. И.: Константин Дмитриевич Кавелин. в кн. “Великая Реформа”. т. 5. М., 1911.
199. Скафтымов, А.: Жизнь и деятельность Н. Г. Чернышевского. Саратов, 1939.
200. Скафтымов, А.: Статьи о русской литературе. Саратов, 1958.
201. Смолицкий, В. Г.: Из равелина—О судьбе романа Н. Г. Чернышевского “Что делать?”, 2-е изд., доп. М., 1977.
202. «Советская педагогика» № 2 (1978)
203. Современник. Литературный журнал. СПб., 1836-1866.
204. Солженицын, А.: Собрание сочинений. В 6 томах. 1972-1973.
205. Соловьев, В. С.: Собрание сочинений, тт. I—X, 2-е изд. СПб., 1911-14. т. V.
206. Сперанский, М.: Русская устная словесность. М., 1917.
207. Сталин, И. В.: Сочинения. в 13 томах. М., 1948-1953.
208. Сталин, И. В.: Сочинения. т. т. XIV—XVI. Стамфорд, 1967.
209. Стеклов, Ю. М.: Вокруг ссылки Н. Г. Чернышевского. в кн. “Каторга и ссылка. Историко-революционный вестник” кн. 33, 1923.

210. Стеклов, Ю. М.: Западные влияния в мировоззрении Н. Г. Чернышевского. «Летописи марксизма» т. 6. (1928)
211. Стеклов, Ю. М.: М. А. Бакунин, его жизнь и деятельность. тт. I—IV. М.-Л., 1926-1927.
212. Стеклов, Ю. М.: Н. Г. Чернышевский, его жизнь и деятельность, 1828-1889 гг. СПб., 1909.
213. Стеклов, Ю. М.: Н. Г. Чернышевский, его жизнь и деятельность, 1828-1889 гг., тт. I—II, 2-е изд. М.-Л., 1928.
214. Тамарченко, Г. Е.: Чернышевский-романист. М., 1976.
215. Таубин, Р. А.: К вопросу о роли Н. Г. Чернышевского в создании революционной партии в конце 50-х-начале 60-х гг. XIX в. «Исторические записки» т. 39. (1952)
216. Твардовский, А.: Василий Теркин. 1973.
217. Теплинский, М. В.: Заметки о романе Н. Г. Чернышевского “Что делать?” «Русская литература» No. 2. (1978)
218. Тихомиров, Л.: Чего нам ждать от революции. «Вестник народной воли» т. II, отд. I. (1884)
219. Ткачев, П. Н.: Избранные сочинения. в 6 томах. М., 1932-1937.
220. Ткачев, П. Н.: Избранные сочинения на социально-политические темы в четырех томах. М., 1933.
221. Толстой, Л. Н.: Педагогические сочинения. М., 1953.
222. Травушкин, Н. С.: Новые эпистолярные материалы и истории лондонского издания “Пролога” Чернышевского. «Русской литературы» No. 1. (1974).
223. Травушкин, Н. С.: Чернышевский в годы каторги и ссылки. М., 1978.
224. Троцкий, Лев.: История русской революции. 1976.
225. Троцкий, Лев.: Сочинения. в 12 томах (15 книгах) М., 1925-
226. Тургенев, И. С.: Полное собрание сочинений и писем. тт. I—XXVIII. М.-Л., 1960-1968.
227. Тургенев, И. С.: Тургенев и круг «Современника». М.-Л., 1930.
228. Хомяков, А.: Избранные сочинения. 1955.
229. Ченпов, Н.: Восстание декабристов. Библиография. М.-Л. 1929.
230. Чернышевская, Н. М.: Летопись жизни и деятельности Н. Г. Чернышевского. М., 1933. (2-е изд. М., 1953.)
231. Чернышевский, Н. Г.: Полное собрание сочинений в десяти томах. СПб., 1906.
232. Чернышевский, Н. Г.: Полное собрание сочинений, тт. I—XVI. М., 1939-1953.
233. Чернышевский, Н. Г.: Избранные философские сочинения, тт. I—III. М., 1950-1951.

234. Чернышевский, Н. Г.: Избранные педагогические произведения. М., 1953.
235. Чернышевский, Н. Г.: Собрание сочинений в пяти томах. М., 1974.
236. Чернышевский, Н. Г.: Избранные произведения в трех томах. Л., 1978.
237. Чернышевский, Н. Г.: Община и государство. Две статьи Н. Г. Чернышевского. Издание журнала «Набат», Женева, 1877.
238. Чернышевский, Н. Г.: Чернышевский в Сибири. Переписка с родными, тт. I—II. СПб., 1912-1913.
239. Чернышевский, Н. Г.: Сборник. Неизданные тексты, статьи, материалы, воспоминания. Саратов, 1926.
240. Чернышевский, Н. Г.: Литературное наследие, тт. I—II., 1927-1930.
241. Чернышевский, Н. Г.: Н. Г. Чернышевский 1828-1928. Неизданные тексты, материалы и статьи. Саратов, 1928.
242. Чернышевский, Н. Г.: Что делать? Из рассказов о новых людях.—Роман, написанный в Петропавловской крепости—В первоначальном виде. М., 1929.
243. Чернышевский, Н. Г.: Эстетика. М., 1958.
244. Чернышевский, Н. Г.: Что делать? Из рассказов о новых людях. Издание подготовили Т. М. Оранская и С. А. Рейсер. Л., 1975.
245. Н. Г. Чернышевский в воспоминаниях современников в двух томах. Саратов, 1958-59.
246. Н. Г. Чернышевский. Сборник статей к 50-летию со дня смерти великого революционера-демократа. Саратов, 1939.
247. Н. Г. Чернышевский. 1889-1939. Сборник статей и материалов. Л., 1940.
248. Н. Г. Чернышевский. 1889-1939. Труды научной сессии к пятидесятилетию со дня смерти. Л., 1941.
249. Н. Г. Чернышевский. Статьи, исследования и материалы, тт. I—VII. Саратов, 1958-75.
250. Чичерин, Б. Н.: Записки прошлого, воспоминания и письма, под ред. С. В. Бахрушина и М. А. Цявловского. М., 1932.
251. Чичерин, Б. Н.: Несколько современных вопросов. М., 1862.
252. Чичерин, Б. Н.: Очерки Англии и Франции. М., 1858.
253. Шелгунов, Н. В., Шелгунова, Л. П. и Михайлов, М. Л.: Воспоминания, тт. I—II. М., 1967.
254. Шульгин, В. Н.: Очерки жизни и творчества Н. Г. Чернышевского. М., 1956.
255. Энциклопедический словарь. Изд.: Ф. А. Брокгауз (Лейпциг) и И. А. Ефрон (С.-Петербург). Тома 1-41 (82 кн.) и 4 допол. тома. СПб, 1890-1907.
256. Якушин, Н.: Г. З. Елисеев и Н. Г. Чернышевский. «Русская литература» № 3. (1966)

257. All Union (Russian) Communist Party. Smolensk Districts Records Group.
258. Bakunin, M. A.: Oeuvres. 6 vols. Paris, 1895-1913.
259. Carr, E. H.: Michael Bakunin. London, 1937.
260. Carr, E. H.: 1919—Before and After. London, 1969.
261. Carr, E. H.: The Romantic Exiles. London, 1949.
262. Cheistoff, Peter K.: An Introduction to Nineteenth-century Russian Slavophilism. 1972.
263. Cole, G. D. H.: Socialist thought, Marxism and Anarchism 1850-1890. London, 1957.
264. Evans, John L.: The Petrashevskij Circle. 1974.
265. Evtouchenko. E.: Autobiographie précoce. Paris, 1963.
266. Feuerbach, L. A.: Sämtliche Schriften. 13 Bde. Stuttgart, 1960-1964.
267. Gertsen, A. I.: Du développement des idées révolutionnaires en Russie. Paris, 1851.
268. Hegel, Georg W. F.: Werke. 20 Bde. Frankfurt, 1969-1976.
269. Iswolsky, H.: Christ in Russia. London, 1962.
270. Kant, Immanuel: Werke in 12 Bde. Frankfurt, 1977.
271. Keenan, E. L.: Muscovy and Kazan—Some Introductory Remarks on the Patterns of Steppe Diplomacy. "Slavic Review No. 26, 1967".
272. Lafargue, P.: La propriété, Origine et évolution. Paris, 1895.
273. Laveleye, Emile de.: De la propriété et de ses formes primitives. Paris, 1874.
274. Maine, Sir H. S.: Village Communities in the East and West. London, 1871. 7th ed. 1895.
275. Marx, K., Engels, F.: Werke. 39 Bde. Berlin, 1956-
276. Marx-Engels.: Gesamtausgabe (MEGA) ca. 100 Bde. Berlin, 1975-
277. Marx, K.: Grundrisse der Kritik der Politischen Ökonomie (Rohentwurf) 1857-1858, Anhang 1850-1859. Berlin, 1953.
278. Masaryk, Th., G.: Russland und Europa—Studien über die geistigen Strömungen in Russland. Jena, 1913.
279. Masaryk, Th., G.: Zur russischen Geschichts—und Religionsphilosophie. Soziologische Skizzen. Jena, 1913.
280. Maurer, G. L., Ritter von: Einleitung zur Geschichte der Mark=, Hof=, Dorf=, und Stadtverfassung und der öffentlichen Gewalt. 1 Bd. München, 1854. 2 Aufl. Wien, 1896.
281. Menshevik Collection. Newspapers, Periodicals, Pamphlets and Books related of the Menshevik Movement. 1903-1919 (234 items, Microfilm, Stamford)

282. Meadows, T. T.: *The Chinese and their Rebellions*. London, 1856.
283. Morgan, Lewis H.: *Ancient Society*. New York, 1877.
284. Pascal, P.: *Histoire de la Russie (des Origines a 1917)*. Pairs, 1946.
285. Paszkiewicz, H.: *The Origin of Russia*. London, 1954.
286. Pomper, P.: *Peter Lavrov and the Russian Revolutionary Movement*. Chicago & London, 1972.
287. *The Russian Revolution. From the October Revolution to the Moscow Trials 1917-1936*. 4 parts 10 vols. (Seeds of Conflict Series 4)
288. Schwarz, S. M.: *Populism and Early Russian Marxism on Ways Economic development of Russia—Continuity and Change in Russian and Soviet thought*. Cambridge, Mass., 1955.
289. Tourgueneff, N.: *La Russie et les Russes*. Paris, 1847.
290. Venturi, F.: *Il Populismo Russo*. Torino, 1952.
291. Vernadsky: *Kievan Russia*. New Hevan, 1948.
292. Voline: *La Révolution inconnue (1917-1921)*. Paris, 1947.
293. Walicki, A.: *Russian Social Thought. An Introduction to the Intellectual History of Nineteenth-century Russia*. «The Russian review. An American quarterly devoted to Russia past and present» Vol. 36, No. 1 (July 1977)
294. Woehrlin, W. F.: *Chernyshevskii. The Man and the Journalist*. Cambridge, Mass., 1971.

My Way of Thinking in *What Is Russian Passion?*

Shigenori NODA

Roshia teki jōnen to wa nani ka (What Is Russian Passion?) (Tokyo, 1975) was first serialized in the *Mita-Shinbun* of Keio University from March of 1970 until November of 1971.

The essay developed along the lines of my interests: the relation between the “everyday lives” of the Russian intelligentsia and the “ideas” which formed the path they chose and the path which was forced upon them. This is a problem similar to that which each intellectual faces today. The essay begins at the place where the Russian intelligentsia encountered their hardships, and inquires whether the “ideas” of these suffering intellectuals and their deep faith and piety can in some way be the canal which connects our “individual existence” with the “community” aspect of our lives. This is a problem which will be set for each individual existence in the future as well.

What Is Russian Passion? is based on the above considerations, and the problems of “What is the meaning of expression?”, “What is the intelligentsia?” became an absolutely necessary substratum for the study. *What Is Russian Passion?* should be viewed as an expression of my own fundamental philosophical position with regard to the “hardships” which passion imposes.